



湯けむりの宿の仲居さん

～紅葉の夜、二人だけの露天で～

湯けむりの宿の仲居さん（体験版）

蜜夜文庫

〽紅葉の夜、二人だけの露天で〽

蜜夜文庫

〽
【体験版】本作の冒頭（第1話・全文）を収録しています。
〽

第二話 湯けむりの出迎え

電車を三度乗り継いで、最後はバスに揺られて一時間。降り立った停留所には、屋根もベンチもなかった。

佐倉透、二十七歳。有給を、生まれて初めて一週間まとめて取った。取ったというより、取らされた、が正しい。三年間、休みなく働いて、ある朝、体が布団から起き上がらなくなった。上司は困った顔で「少し、休め」と言った。心配ではなく、厄介払いの色が混じっていたことに、俺は気づいていた。

どこでもよかった。ただ、誰も俺を知らない場所へ行きたかった。スマホで適当に検索して、いちばん辺鄙に見える温泉宿を予約した。それが、この山の奥だった。

バスを降りて、俺は、しばらく動けなかった。

山が、燃えていた。

紅葉だ。赤も、黄も、朱も、名前を知らない色まで、山肌いっぱい広がっている。都会のくすんだ空しか見ていなかった目に、その色は、痛いくらいに鮮やかだった。冷たい山の空気が、肺の奥まで入ってくる。どこからか、硫黄の混じった、湯の匂いがした。

——なんだ、こんな場所が、あったのか。

三年間、俺は何を見ていたんだろう。パソコンの画面と、終電の窓と、コンビニの蛍光灯。それだけだった気がする。

川のせせらぎが聞こえた。見下ろすと、溪流が、岩のあいだを縫って流れている。水面に、紅葉が一枚、二枚と落ちて、くるくると回りながら、下流へ運ばれていった。

スマホを取り出すと、電波は、一本しか立っていなかった。会社のメールも、チャットの通知も、ここまでは届かない。いつもなら、それを不安に感じたはずだった。けれど今は、その圏外の記号が、なぜか、救いのように見えた。誰も、俺を呼ばない。誰も、俺に何かを求めない。ただ、山と、川と、湯の匂いだけが、ここにある。

細い坂道を下ると、川沿いに、古い木造の宿が一軒、ぽつんと建っていた。「紅葉屋」。かすれた木の看板が、軒下で揺れている。まさに、名前のとおりの季節だった。二階建ての、こぢんまりとした宿だ。屋根の上に、湯気が、ゆらゆらと立ちのぼっている。

俺は、ため息のような息を吐いて、その暖簾をくぐった。木と、畳と、かすかな線香の匂いがした。都会のホテルの、消毒液みたいな匂いとは、まるで違う。三年ぶりに、肩の力が、少しだけ、抜けた気がした。

*

「いらつしやいませ。お待ちしております」

玄関で、三つ指をついて出迎えたのは、一人の仲居さんだった。

紺地に、小さな紅葉を散らした着物。きちんと結い上げた黒髪。俺と目が合うと、その人は、ふっと、やわらかに微笑んだ。

年上の、女の人だった。たぶん、三十を少し過ぎたくらい。派手さはない。けれど、所作のひとつひとつが、静かで、綺麗で、俺は、玄関先で、間拔けに立ち尽くしてしまった。

「佐倉様、でいらつしやいますね。お一人様で、四泊。……遠いところを、ようこそ」

「あ……はい。どうも」

うまく、言葉が出なかった。三年間、俺が交わしてきた会話は、謝罪と、報告と、指示ばかりだった。ただ「ようこそ」と、心のこもった声で言われることが、こんなにも、久しぶりだった。

「わたくし、仲居の綾乃と申します。ご滞在のあいだ、佐倉様のお世話をさせていただきます。何なりと、お申し付けくださいませ」

綾乃さん、というらしい。

俺の荷物を持つとうとするので、慌てて「自分で持てます」と言うと、綾乃さんは、少し困ったように笑って、「では、お部屋まで、ご案内いたしますね」と、先に立って歩き出した。

通された部屋は、二階の角部屋だった。八畳の和室に、こたつがひとつ。窓を開けると、目の前に、紅葉の山と、溪流が広がっていた。思わず、声が出た。

「……すごい」

「お気に召しましたか」

綾乃さんが、俺の隣に立って、同じ景色を見た。ふわりと、彼女の着物から、白粉のような、甘く上品な香りがした。近くで見ると、うなじの生え際が、白くて、細くて、俺は、慌てて視線を、窓の外へ戻した。

「この時期は、紅葉がいちばん綺麗なんです。あと一週間もすると、みんな散つてしまいますから……いい時にいらつしやいました」

「散っちゃうんですか」

「ええ。……綺麗なものほど、長くは続かないんです。だから、今のうちに、たくさん見ておいってくださいね」

その言葉に、なぜか、少しだけ、胸が締めつけられた。綺麗なものほど、長くは続かない。それは、紅葉のことだけを、言っているようには、聞こえなかった。

磨き込まれた木の廊下を戻るとき、彼女の足袋の下で、床がかすかに鳴った。窓の外は、一面の紅葉。その赤を背にして歩く綾乃さんの後ろ姿を、俺は、ぼんやりと追いかけていた。着物の帯の結び目が、歩くたびに、小さく揺れる。その、慎ましい後ろ姿から、俺は、目を離せずにいた。

ふと、彼女が、窓の外に目をやった。その横顔に、一瞬、笑みではない、何か——寂しさのようなものが、よぎった気がした。けれど、俺が瞬きをすると、それはもう、消えていた。

気のせいだろう、と思った。この人は、この宿の、完璧な仲居さんだ。俺みたいな、くたびれた客の考えることなんて、お見通しに違いない。

*

夜。夕食は、部屋ではなく、囲炉裏のある広間だった。

自在鉤に吊るされた鉄瓶が、しゅんしゅんと音を立てている。囲炉裏の火が、ぱち、と爆ぜて、火の粉が舞い上がった。串に刺した岩魚が、炭火の縁で、ゆつくりと焼けていく。窓の外はもう真つ暗で、時折、木枯らしが、雨戸を、こと、と鳴らした。

「地の物ばかりで、恐縮ですが」

綾乃さんが、酌をしてくれた。地元の酒だという。ひやりとした徳利から注がれた酒は、口に含むと、甘くて、少しだけ、辛かった。

「……うまい、です」

「よかった。……佐倉様、都会からいらしたんですね。こんな、何もないところで、退屈じゃありませんか」

「いえ」

俺は、囲炉裏の火を見つめて、言った。

「何もないのが……ちよいどいいんです。今は」

綾乃さんは、少しだけ、目を見開いた。それから、俺の言葉の奥にあるものを、静かに受け止めるように、「……そうですか」とだけ、言った。それ以上は、何も訊かなかった。その、訊かない優しさが、じんと、胸に沁みた。

「綾乃さんは、ずっと、この宿で」

今度は、俺が訊いた。綾乃さんは、酌をする手を、ほんの一瞬、止めた。

「……いいえ。何年か、都会にいたんです。でも、いろいろあつて……三年前に、戻ってきました。ここは、わたしの、生まれた家なので」

いろいろ。その一言に、たくさんのが、畳み込まれている気がした。俺と、同じだ。この人も、何かに疲れて、ここへ帰ってきたのかもしれない。

囲炉裏の火が、二人の顔を、赤く照らしていた。焼けた岩魚を、綾乃さんが、俺の皿に取り分けてくれる。皮は香ばしく、身はほろりと崩れて、川の水のような、清らかな味がした。塩だけの、素朴な料理。けれど、こんなにうまいものを、俺は、久しぶりに食べた気がした。

「……ゆつくり食べる、っていうのも、久しぶりです」

「まあ。お忙しかったんですね」

「毎日、コンビニの弁当を、パソコンの前でかき込んでました。味なんて、覚えてないな」

自嘲するように言くと、綾乃さんは、笑わなかった。ただ、静かに、俺を見て、言った。

「……ここにいるあいだは、ちゃんと、味わってくださいね。ごはんも、景色も、時間も。全部」

その言葉は、なんてことのない、仲居さんの気遣いだったのかもしれない。でも、俺には、それが、ずつと張りつめていた糸を、そつと緩めてくれる、魔法の言葉のように聞こえた。

二杯目の酒を、手酌で注ぐうとすると、綾乃さんが、「あ」と、徳利を取って、注いでくれた。彼女の指が、俺の持つ盃の縁に、また、かすかに触れた。囲炉裏の火のせいだけではない熱が、俺の頬に、じんわりと上ってくるのを感じた。

いけない、と思った。相手は、仲居さんだ。仕事で、俺に優しくしてくれているだけだ。それを、勝手に意識するなんて。

わかつている。わかつているのに、俺の目は、酒を注ぐ彼女の、伏せたまつげと、白い横顔から、離れなかった。

*

食事のあと、俺は、露天風呂へ向かった。

綾乃さんが、「足元が暗いので」と、手燭を持って、廊下の途中まで送ってくれた。長い、渡り廊下だった。片側は障子、片側は、月明かりに沈む中庭。二人分の足音だけが、しん、と響く。

「このお宿の露天は、川に面しております。夜は、星がよく見えるんですよ」

「そうなんですか」

「ええ。……わたしも、しんどいことがあると、夜、こっそり入るんです。お客様がいらつしやらない時間に」

そう言つて、綾乃さんは、いたずらっぽく、少し笑った。仲居さんの顔ではなく、ひとりの女の人の、素の笑顔だった。

その瞬間、俺の胸の奥で、何かが、小さく揺れた。

「綾乃さんは、しんどいこと、あるんですか」

つい、訊いてしまった。こんな、完璧な仲居さんに、失礼な質問だと、言ってから気づいた。けれど綾乃さんは、気を悪くするでもなく、月の沈む中庭に、目をやった。

「……ありますよ。わたしだって、人間ですから」

木枯らしが、渡り廊下を、ひゅう、と吹き抜けた。彼女の着物の裾が、かすかに揺れる。

「でも、ここのお湯に浸かって、星を見上げると……不思議と、どうでもよくなるんです。ちつぽけだなあって。悩みも、自分も、全部。……だから佐倉様も、今夜は、ゆつくり浸かってくださいね」

その声は、やさしくて、けれど、どこか、自分自身に言い聞かせているようにも、聞こえた。

渡り廊下の途中で、綾乃さんが立ち止まる。「この先を、まっすぐです」と、手燭を、俺の手に渡してくれた。彼女の指先が、俺の手に、かすかに触れた。ひやりと冷たくて、けれど、やわらかい指だった。渡すとき、ほんの一瞬だけ、彼女の指が、俺の手のひらに、留まった気がした。

俺は、その感触を、しばらく、忘れられなかった。手燭のあかりに照らされた彼女の顔が、俺を見上げて、「では、ごゆつくり」と、微笑む。その微笑みを、俺は、露天に着いてからも、湯に浸かりながら、何度も、思い返していた。

星が、降るように、出ていた。綾乃さんの言うとおりだった。溪流のせせらぎと、湯の湧く音だけが、闇のなかに満ちている。熱い湯に肩まで浸かると、体の芯から、こわばりが、ゆつくりと溶けていった。三年分の疲れが、湯に溶け出していくようだった。

——不思議と、どうでもよくなる。

彼女の言葉は、本当だった。会社のこと、上司の顔も、遠くなっていく。かわりに、頭に浮かぶのは、囲炉裏の火に照らされた、綾乃さんの、白い横顔だった。

このとき、俺は、まだ知らなかった。

たった四泊のこの旅が、燃え尽きたはずの俺の心に、もう一度、火を灯すことになるなんて。この静かな仲間さんの、着物の下の温もりまで、知ってしまうことになるなんて――。

……

——続きは、製品版でお楽しみください。